

大学生のセクシュアルマイノリティ受容感に関する研究

—セクシュアルマイノリティへの共感的態度に着目して—

迎 若 葉¹⁾・園 田 直 子²⁾・富 田 真 弓²⁾

要 約

現代の日本では、セクシュアルマイノリティ非当事者は、当事者を十分に理解していないため、当事者のことを理解し受容していくことが重要である。そのため、本研究ではセクシュアルマイノリティ受容感を高めるための要因について検討した。研究1では、セクシュアルマイノリティ受容感に当事者との個人的接触経験や異質拒否傾向の低さ、「性の多様性」授業を通して当事者への共感的態度が形成されることが関連していることが明らかになった。研究2では、セクシュアルマイノリティへの共感的態度に着目した「性の多様性」授業の効果について検討した。その結果、セクシュアルマイノリティへの共感的態度に着目して授業を行うことは、セクシュアルマイノリティ受容感を高める上で、有効であることが明らかになった。

キーワード：セクシュアルマイノリティ、受容感、共感的態度、「性の多様性」授業

問題と目的

ここ数年のセクシュアルマイノリティに関する出来事として、同性友人に同性愛者だとアウトティング（許可なく他人に性について話すこと）され、告白した人が自殺した事件や（千葉，朝日新聞，2019）、「同性愛者が法律で守られると足立区が減ぶ」等の足立区議員がセクシュアルマイノリティ当事者（以下；当事者）に対する差別や同性婚を認めない発言をしたこと（北沢，朝日新聞，2020）がある。社会の中で、当事者が性に関する差別や偏見を受けずに受容されることは、生きにくさを抱える当事者が生きやすさを感じる上で重要である。では、当事者を受容するとはどのようなことであろうか。

セクシュアルマイノリティの受容に関して、和田（1996）や宮澤・福富（2008）は、セクシュアルマイノリティの一つである同性愛者に対する態度を測定する尺度を作成している。同性愛者に対する態度につい

て、和田（1996）は「社会的容認度」「心理的距離感」「ポジティブイメージ」の3因子を抽出している。宮澤・福富（2008）は社会的容認度ではなく「社会的認知」「心理的距離」「ポジティブイメージ」に加え、「ネガティブイメージ」の4因子を抽出している。一方、古長（2016）は、先行研究（和田，1996；宮澤・福富，2008）は同性愛に対する態度を広く捉えているが、現代における日本の同性愛に対する受容感が高まってきており、同性愛者を受け入れていくような社会的流れになっていることを指摘し、同性愛の受容感に焦点づけ、和田（1996）の「社会的容認度」や「心理的距離感」、宮澤・福富（2008）の「社会的認知」や「心理的距離」の項目（「同性愛が存在するのは当然だ」「同性愛者とともに行動することができる」）を中心とした「同性愛者受容感尺度」を作成している。同性愛への受容感を、同性愛者という存在や概念を社会の中で受容できることである「社会的受容感」、同性愛者という個人を身近に想定した場合でもその存在を受容でき

1) 佐賀中部保健福祉事務所
2) 久留米大学文学部心理学科

ることである「個人的受容感」の2つの視点から捉えている。「社会的受容感」だけでなく、同性愛者という個人を身近に想定した「個人的受容感」はセクシュアルマイノリティの受容感には重要であると考えられるため、本研究ではセクシュアルマイノリティ受容感を「社会的受容感」と「個人的受容感」の2側面から捉える。

セクシュアルマイノリティ受容感を持つには、どのようなことが必要であろうか。その手がかりの一つとして、セクシュアルマイノリティ非当事者（以下；非当事者）が当事者を支援するアライ（Ally）となり、活動するまでのプロセスが参考になると考える。

アライとは、「セクシュアルマイノリティに好意的で、セクシュアルマイノリティの活動を支える異性愛者のこと」（葛西・小渡，2018）である。アライとなり活動するようになるまでの段階についての研究として、Washington & Evans (1991) と葛西・小渡 (2018) があるが、これらに共通している点が2つある。1つ目は当事者との相違点・共通点に気づくことであり、2つ目は当事者の困難や苦労といった現状を理解することである。非当事者が当事者との相違点・共通点に気づくには、当事者とはセクシュアルな部分は異なるが、セクシュアルな部分以外は人として同じであることに気づく必要がある。また非当事者が当事者の困難や苦労といった現状を理解するには、社会の中で暮らしていくことや非当事者と接していく中で実際に当事者にどういった不利益が生じているかを理解することが必要である。この2つがセクシュアルマイノリティ受容感には、重要であると考えられる。

この当事者との相違点・共通点に気づき、当事者の現状の理解を促進する要因として、本研究では、「性の多様性」に関する授業と個人的接触経験、セクシュアルマイノリティの知識に着目する。

「性の多様性」授業について、佐々木 (2018) は、中学生を対象に同性愛やトランスジェンダーへの嫌悪に焦点を当て、当事者が悩みや苦しみについて語ったビデオを視聴し、当事者の気持ちを考える「性の多様性」授業を行うことで、「同性愛・トランス嫌悪」が低減することを明らかにし、「性の多様性」授業の中で、生徒が同性愛者やトランスジェンダーの人が持つ差別的な発言をされたときの誰にも言えない気持ちや性別違和に苦しむ気持ちを考え共感したことが、同性愛やトランスジェンダーへの嫌悪を低下させたと考えられている。また、福島 (2015) は、多様な価値観の存在を認識しつつ、他者と対話し協働するようなセクシュアリティの多様性に関する教育を行うことで、自己・他者

理解が向上することを明らかにし、セクシュアリティ教育を通し、他者との違いを肯定的に受け止め他者との関係作りへの意欲を持つことで、自他尊重と多様性尊重の態度が高まったと考察している。

これらのことから、「性の多様性」授業の中で、同性愛者やトランスジェンダーなどの当事者の気持ちに共感し、当事者との相違点を肯定的に受け止め、当事者のことを知ろうとすることによって、当事者との相違点・共通点に気づき、当事者の困難や苦労といった現状を知ることにつながる考える。

そこで本研究では、当事者との共通点に気づいたか、当事者の立場を想像したか、当事者のことを踏まえた言動をしようとするか、当事者のことを深く知ろうとするか、の4つを「セクシュアルマイノリティへの共感的態度」とし、セクシュアルマイノリティ受容感と、「性の多様性」授業の受講経験だけでなく、「性の多様性」授業を通し形成されたセクシュアルマイノリティへの共感的態度との関連を検討する。

個人接触経験について、中島 (2012) や和田 (2008) は、同性愛者の知人や友人がいることや同性愛に関するもの（同性愛をテーマとした番組や小説など）との接触経験が、同性愛者へのネガティブイメージや嫌悪・拒否を低減することが明らかにしている。また、葛西ら (2018) は、非当事者は当事者との出会いや体験談が書かれた書籍や映画との経験をきっかけに、当事者の人柄や悩みを知ったと述べている。このことから、セクシュアルマイノリティ受容感には個人的接触経験が関連すると考える。

セクシュアルマイノリティの知識に関して、和田 (2008) は同性愛における単語の知識や同性愛への差別用語や偏見、日本の法制度（同性婚等）について正しい知識があるかといった同性愛に対する知識量が多い男性ほど、男性同性愛に対する嫌悪・拒否、ネガティブイメージが低く、同性愛に対する知識量が多い女性ほど、同性愛に対する嫌悪・拒否、ネガティブイメージが低く容認・寛容が高いことを明らかにしている。中島 (2012) は和田 (2008) の項目に加え、同性愛に対する宗教的弾圧と幼い頃の性的いたづらに関する項目を加え、同性愛に対する態度との関連を検討しており、同性愛に対する知識があると、同性愛に対する嫌悪・拒否、ネガティブイメージに負の影響を及ぼすという点では和田 (2008) と同様の結果を得ているが、容認・寛容には影響しないことを明らかにしている。これらのことから、同性愛についての正しい知識があると、少なくとも同性愛に対する嫌悪やネガティ

ブイメーが低くなると考えられ、嫌悪やネガティブなイメージは個人的な受容感に影響すると推察する。そこで、本研究では、セクシュアルマイノリティの知識量との関連についても検討する。

また、「性の多様性」授業、セクシュアルマイノリティとの個人的接触経験、セクシュアルマイノリティの知識とは関連せず、もともとの個人特性として、自分と異質な存在の受け入れやすさである「異質拒否傾向」（高坂，2010）がある。異質拒否傾向が高い人は、同性愛に対する嫌悪・拒否が高い（田中・伊藤・葛西，2019）ことから、異質拒否傾向がセクシュアルマイノリティ受容感に負の影響があることを検討する。

本研究では、セクシュアルマイノリティの受容感を高める要因を明らかにすることを目的とする。セクシュアルマイノリティ受容感を高める要因として、経験としての「性の多様性」授業の受講と「性の多様性」授業を通して形成されたセクシュアルマイノリティへの共感的態度、および個人的接触経験、セクシュアルマイノリティの知識、個人特性としての異質拒否傾向を仮定し、これらがセクシュアルマイノリティ受容感とどのように関連しているかを検討する（研究1）。また、「性の多様性」授業においては、当事者との共通点に気づく、当事者の立場を想像する、当事者のことを踏まえた言動をする、セクシュアルマイノリティのことを深く知ろうとする、というセクシュアルマイノリティへの共感的態度が重要であると考え、セクシュアルマイノリティへの共感的態度に焦点を当てた「性の多様性」授業のセクシュアルマイノリティ受容感への効果を検討する（研究2）。

研究1 目的

「性の多様性」授業および個人的接触経験、セクシュアルマイノリティの知識、異質拒否傾向とセクシュアルマイノリティ受容感との関連を明らかにすることが目的である。その際、「性の多様性」授業を通し形成されたセクシュアルマイノリティへの共感的態度がセクシュアルマイノリティ受容感を高めるのかについても併せて検討を行う。

仮説は、以下の通りである。

仮説1) 「性の多様性」授業の受講経験と個人的接触経験のいずれもない群は、「性の多様性」授業経験かセクシュアルマイノリティの個人的接触経験のどちらかの経験がある群に比べ、セクシュアルマイノリティ受容感が低い。仮説2) 「性の多様性」授業で形成された

セクシュアルマイノリティへの共感的態度はセクシュアルマイノリティ受容感に正の影響を及ぼす。仮説3) 異質拒否傾向は、「性の多様性」授業、セクシュアルマイノリティとの個人的接触経験、セクシュアルマイノリティの知識、セクシュアルマイノリティへの共感的態度とは独立して、セクシュアルマイノリティ受容感に負の影響を及ぼす。

方 法

調査協力者

九州圏内のA大学52名、B大学129名、C大学15名のうち、性別を「その他」と回答しているもの、当事者と回答しているものを除いた、計189名（平均年齢19.43±1.31歳、男性57名、女性132名）を分析対象者とした。

質問紙の構成

1) セクシュアルマイノリティ受容感

古長（2016）が作成した「同性愛者受容感尺度」のうち、「男性同性愛者（ゲイ）／女性同性愛者（レズビアン）」という記載について、「男性同性愛者（ゲイ）／女性同性愛者（レズビアン）は愛の一つの形態である」「男性同性愛者（ゲイ）／女性同性愛者（レズビアン）の結婚も法律で認められるべきだ」の2項目は、「男性同性愛者（ゲイ）／女性同性愛者（レズビアン）」を「同性愛、両性愛」へ、他の項目はを「セクシュアルマイノリティ当事者」と変更した。「社会的受容感」9項目、「個人的受容感」8項目の計17項目について、1：「全くそう思わない」～7：「とてもそう思う」の7件法で回答を求めた。

2) 「性の多様性」授業

過去の「性の多様性」授業の受講経験（「はい」「いいえ」「わからない」の3択）、「性の多様性」授業の受講時期、内容（当事者の体験を聞いて困難や不快なことを学ぶ、自分の思いこみに気づくもの、当事者が直面する困難について学ぶもの、今までの言動を振り返るもの、性の要素）について回答を求めた。また、セクシュアルマイノリティへの共感的態度を把握するために、独自に作成した「セクシュアルマイノリティ当事者の困難や不快なことを知り、自分がその立場だったらどう思うか想像した」「自分にも、セクシュアルマイノリティ当事者と共通している部分があることに気づいた」「セクシュアルマイノリティ当事者についてより深く知りたいと感じた」「セクシュアルマイノリティ当事者のことを考えて発言しようと思った」の4

項目について、1：「全くあてはまらない」～5：「とてもあてはまる」の5件法にて回答を求めた。

3) セクシュアルマイノリティとの個人的接触経験

直接的接触経験：中島 (2012) を参考に、「知人」、「友人」、「家族」、「親戚」に当事者がいるかを複数回答で求めた。また、本人が当事者かどうかについても回答を求めた。

間接的接触経験：中島 (2012)、和田 (2008) を参考に、セクシュアルマイノリティに関するものとの接触経験（当事者が出演している番組、セクシュアルマイノリティをテーマとした小説や漫画等）8項目について、複数回答を求めた。

4) セクシュアルマイノリティの知識

中島 (2012) の同性愛に対する知識項目を参考に独自に作成した、セクシュアルマイノリティの知識を問う17項目について「正しい」「正しくない」「わからない」の3択で回答を求めた。

5) 異質拒否傾向

高坂 (2010) が作成した異質拒否傾向の12項目について1：「あてはまらない」～5：「あてはまる」の5件法にて回答を求めた。

手続き

2020年6月下旬～8月下旬に、講義前もしくは講義中に調査を依頼し、REASにてWeb調査を行った。調査協力者に対して本研究の趣旨と回答方法、倫理的配慮についての説明文を明示したうえで、同意した場合にのみ調査の回答を求めた。所要時間は15分程度で

あった。尚、本研究は久留米大学御井学舎倫理委員会（研究番号；389）の承認を得ている。

結 果

1) セクシュアルマイノリティ受容感尺度の因子構造の検討

古長 (2016) の「同性愛者受容感尺度」から項目を一部変更したため、因子構造を確認するために、最小二乗法 (Promax 回転) による因子分析を行った結果、因子負荷量が .35未満、2つ以上の因子に .35以上を示す3項目を削除した。項目数は異なるが、因子を構成している項目は古長 (2016) の因子構造と同様であるため、2因子を採用した。最終的な因子構造を表1に示す。表1よりそれぞれの因子の信頼性が確認された。

2) セクシュアルマイノリティの知識の正答率と得点化

セクシュアルマイノリティの知識項目の回答結果及び重みづけした項目の得点を表2に示す。得点は、和田 (2008) を参考に、正答率により重みづけをして得点化し、正答した項目の得点の合計をセクシュアルマイノリティの知識量得点とした。

表2より、正答率が低い項目、高い項目どちらも誤答率より「わからない」割合が高く、正答率が低い項目であっても、間違った知識を持っているわけではなかった。

3) 「性の多様性」授業の受講有無、セクシュアルマイノリティとの間接的接触経験、セクシュアルマイ

表1 セクシュアルマイノリティ受容感尺度の因子分析結果

第1因子 個人的受容感 ($\alpha=.93$)	F1	F2
2 セクシュアルマイノリティ当事者が友達にいても気にせず付き合う	.931	-.107
1 セクシュアルマイノリティ当事者の後輩にいても気にせず付き合う	.891	-.070
4 セクシュアルマイノリティ当事者と友達になれる	.813	.090
10 セクシュアルマイノリティ当事者とともに行動することができる	.754	.106
9 セクシュアルマイノリティ当事者には近寄りたくない*	-.752	.006
8 セクシュアルマイノリティ当事者の先輩にいても気にせず付き合う	.744	.056
12 セクシュアルマイノリティ当事者と共同生活（寮など）を送ることができる	.695	.085
3 セクシュアルマイノリティ当事者とは関わり合いたくない*	-.601	-.168
第2因子 社会的受容感 ($\alpha=.85$)	F1	F2
14 セクシュアルマイノリティ当事者であることは恥ずかしいことではない	-.083	.829
7 同性愛、両性愛は愛の一つの形態である	-.038	.804
11 セクシュアルマイノリティ当事者が差別されるのはおかしい	.047	.797
15 セクシュアルマイノリティ当事者が存在するのは当然だ	.093	.558
13 同性同士の結婚も法律的に認められるべきだ	.141	.556
16 セクシュアルマイノリティ当事者は異常な状態である*	-.076	-.457
	F1	-.666
	F2	.666

* は逆転項目

表2 セクシュアルマイノリティの知識の正答率、誤答率と得点化（正答率による降順）

	質問項目	正誤	正答率	誤答率	「わからない」	点数
1	今でも同性愛を禁じる国があるが、一方で同性同士の結婚を法律で認める国や、それに近い権利を認める国がある	○	97.4	1.1	1.6	1
2	今の日本では、セクシュアルマイノリティ当事者であることが分かると不利益を生じることから、自分が当事者であることを隠し、生活している人が多い	○	87.8	3.2	9.0	2
3	女性の恰好をしている男性は、みんな心が女性である	×	77.8	2.6	19.6	3
4	素晴らしい異性に巡り合わなかったから、同性愛者になる	×	77.3	2.1	20.6	
5	同性愛は一時的なものである	×	69.8	0.5	29.6	4
6	男性同性愛者は、心は女性である	×	68.8	1.1	30.2	
7	エイズ患者の大半は同性愛者である	×	67.2	2.1	30.7	
8	「カミングアウト」とは、自分がセクシュアルマイノリティ当事者であることを他者にいうことを表す言葉である	○	58.2	18.5	23.3	5
9	「ホモ」「オカマ」とは、同性愛者を軽蔑・嘲笑するときに使われる	○	57.1	19.0	23.8	
10	幼いころに性的ないたづらを受けた子どもは、成長してから同性愛者になることが多い	×	31.8	5.8	62.4	6
11	「レズ」という呼び名は、女性同性愛者に対する肯定的な呼び方である	×	30.7	24.9	44.4	
12	セクシュアルマイノリティに該当する人の割合は1%（100人に1人）である	×	29.6	6.3	64.0	7
13	現在の日本では、希望をすれば誰でも性転換手術ができる	×	28.6	25.4	46.0	
14	本人の許可を取らず、その人の性について他人にいうことを「アウトティング」という	○	22.2	1.1	76.7	
15	身体的な性別と、性自認が違う人たち（性別違和）は生まれつきである	○	20.6	36.5	42.9	8
16	セクシュアルマイノリティのシンボルとして、主に使われているのは「ホワイトフラッグ」である	×	20.6	5.3	74.1	
17	FtMとは、女性の身体を持ちながら、性自認は男性であることをいう	○	14.8	0.5	84.7	

○：正しい ×：正しくない

ノリティへの共感的態度、セクシュアルマイノリティの知識、異質拒否傾向と、セクシュアルマイノリティ受容感との関連

「性の多様性」授業の受講有無によるセクシュアルマイノリティ受容感と異質拒否傾向の差異を検討するために、セクシュアルマイノリティ受容感の下位尺度ごとに対応のないt検定を行った結果、いずれも有意差は見られなかった（表3）。

また、社会的受容感、個人的受容感と、間接的接触経験の数、知識量、異質拒否傾向、セクシュアルマイノリティへの共感的態度との間の関連を検討するため、ピアソンの積率相関係数を算出した（表4）。表4より、社会的受容感と間接的接触経験数との間に弱い正の相関、異質拒否傾向との間に弱い負の相関、セク

シュアルマイノリティへの共感的態度との間に比較的強い正の相関が見られ、個人的受容感と間接的接触経験数との間に弱い正の相関、異質拒否傾向との間に弱い負の相関、セクシュアルマイノリティへの共感的態度との間に比較的強い正の相関が見られた。

社会的受容感、個人的受容感それぞれ目的変数とし

表4 相関分析結果

	社会的受容感	個人的受容感
間接的接触経験数	.23**	.35**
知識量	.05	.05
異質拒否傾向	-.23**	-.29**
共感的態度 ^{a)}	.51**	.52**

**p < .01 a) 共感的態度は、「性の多様性」授業受講有（n=133）のみ

表3 「性の多様性」授業の受講有無とセクシュアルマイノリティ受容感、異質拒否傾向との関連

	社会的受容感					個人的受容感					異質拒否傾向				
	M	SD	df	t 値	d	M	SD	df	t 値	d	M	SD	df	t 値	d
受講有 (n=133)	37.50	4.55	104.09	.66	.10	46.39	8.55	114.24	.10	.02	29.46	8.17	117.54	.72	.11
受講無 (n=56)	37.98	4.52				46.52	7.69				28.61	7.13			

d=.20（小さな効果） d=.50（中程度の効果） d=.80（大きな効果）

て、「性の多様性」授業の受講有群について、知識量、間接的接触経験数、セクシュアルマイノリティへの共感的態度、異質拒否傾向を説明変数とし、重回帰分析を行った。「性の多様性」授業の受講無群について、共感的態度以外の変数を説明変数として同様に分析を行った。「性の多様性」授業の受講有群では、社会的受容感と個人的受容感ともに、セクシュアルマイノリティへの共感的態度から有意な正の影響が見られ、個人的受容感については、異質拒否傾向から有意な負の影響が見られた。「性の多様性」授業の受講無群では、社会的受容感、個人的受容感ともに間接的接触経験から有意な正の影響が見られた（表5）。

4) 「性の多様性」授業及びセクシュアルマイノリティとの個人的接触経験とセクシュアルマイノリティ受容感との関連

「性の多様性」授業の受講および、個人的接触経験と、セクシュアルマイノリティ受容感との関連について検討するため、「性の多様性」授業の受講有無、個人的接触経験を独立変数、社会的受容感、個人的受容感を従属変数とし2要因分散分析を行った（表6, 7）。

その結果、社会的受容感、個人的受容感ともに個人的接触経験のみ主効果が見られ、個人的接触経験有群が無群よりもセクシュアルマイノリティ受容感が高かった。「性の多様性」授業の主効果、交互作用はみられなかった。

考 察

1) 「性の多様性」授業の受講有無及びセクシュアルマイノリティとの個人的接触経験有無とセクシュアルマイノリティ受容感

「性の多様性」授業の受講経験に関わらず、個人的接

触経験がある人がない人よりもセクシュアルマイノリティ受容感が高かったことから、仮説1は支持されず、仮説2は支持された。「性の多様性」授業の受講経験は関連しなかったが、セクシュアルマイノリティへの共感的態度からセクシュアルマイノリティ受容感に正の影響が見られたことから、「性の多様性」授業を通してセクシュアルマイノリティへの共感的態度が形成されることがセクシュアルマイノリティ受容感を高めると考える。

個人的接触経験については、「性の多様性」授業の受講有無に関わらず、間接的な個人的接触経験があると、社会的受容感が高かった。社会的受容感とは同性婚や社会的立場、セクシュアルマイノリティを異常だと思いかどうかなど社会的に受容できるかを測定するため、個人的接触経験により当事者の現状を知ることによって社会的受容感が高くなると考える。また、当事者と間接的にも直接的にも関わった経験があると個人的受容感が高かった。当事者と関わることで、人物像がイメージしやすく、個人的受容感が高くなったと考える。

2) セクシュアルマイノリティの知識とセクシュアルマイノリティ受容感

知識の正答率、誤答率については、同性婚の国ごとの法律の差異に関する項目1は正答率が最も高く、同性婚やパートナーシップ制度についての報道がテレビや新聞で取り上げられていることが関連していると考えられる。最も誤答率が高かったのは項目15であり、性別違和は生まれつきではないと考える人が36.5%あり、性自認は変化すると考えている人がいる可能性が推察される。また、誤答率は全て4割を超えていないが、3割以上が「わからない」と回答した項目が17項目中11項目あったことから、セクシュアルマイノリティに

表5 セクシュアルマイノリティ受容感への影響

	社会的受容感			個人的受容感		
	<i>B</i>	<i>SEB</i>	β	<i>B</i>	<i>SEB</i>	β
受講無 (<i>n</i> = 56)						
間接的接触経験数	1.51	.40	.47**	3.01	.66	.55**
知識量	0.02	.04	.06	-0.04	.07	-.08
異質拒否傾向	-0.06	.08	-.10	-0.19	.13	-.18
<i>R</i> ²	.32**			.26**		
受講有 (<i>n</i> = 133)						
間接的接触経験数	-0.08	.24	-.03	0.85	.43	.16
知識量	-0.01	.03	-.02	0.00	.05	.00
異質拒否傾向	-0.08	.04	-.15	-0.26	.08	-.25**
共感的態度	0.93	.16	.49**	1.45	.29	.41**
<i>R</i> ²	.28**			.34**		

***p* < .01

表6 授業受講と個人的接触経験の2要因分散分析(社会的受容感)

個人的接触経験	社会的受容感					
	受講有群			受講無群		
	両方有	間接のみ	両方無	両方有	間接のみ	両方無
<i>n</i>	38	74	17	10	35	10
<i>M</i>	37.95	37.73	35.47	39.55	38.49	34.50
<i>SD</i>	0.73	0.52	1.09	1.35	0.76	1.42
	<i>F</i> 値			η^2		
「性の多様性」授業	0.30			0.00		
個人的接触経験	5.93** (両方無<間接のみ*)			0.06		
交互作用	0.61 (両方無<両方有*)			0.01		

***p* < .01 η^2 = .40 (大きい), .25 (中程度), .10 (小さい)

※両方有：直接, 間接ともに経験有 間接のみ：間接のみ経験有 両方無：直接, 間接ともに経験無

※直接的接触経験のみはいなかった

表7 授業受講と個人的接触経験の2要因分散分析(個人的受容感)

個人的接触経験	個人的受容感					
	受講有群			受講無群		
	両方有	間接のみ	両方無	両方有	間接のみ	両方無
<i>n</i>	38	74	17	10	35	10
<i>M</i>	50.55	45.31	42.12	52.36	46.23	41.10
<i>SD</i>	1.28	0.91	1.91	2.37	1.33	2.49
	<i>F</i> 値			η^2		
「性の多様性」授業	0.15			0.00		
個人的接触経験	12.04** (間接のみ<両方有**)			0.12		
交互作用	0.24 (両方無<両方有**)			0.00		

***p* < .01 η^2 = .40 (大きい), .25 (中程度), .10 (小さい)

※両方有：直接, 間接ともに経験有 間接のみ：間接のみ経験有 両方無：直接, 間接ともに経験無

※直接的接触経験のみはいなかった

ついて誤解をしているというより、知識が十分でないことが考えられる。セクシュアルマイノリティに関連する言葉や法律や制度など正しい知識を伝えていく必要があると考える。

知識量については、知識とセクシュアルマイノリティ受容感との関連は見られず、同性愛に対する知識から同性愛者に対する容認・寛容に影響がみられなかった(中島, 2012) 結果と一致している。中島(2012)は、同性愛者の肯定的な態度について、同性愛に対する知識を持った状態で同性愛における問題に正面から向き合う必要性を指摘している。セクシュアルマイノリティの知識も同様に、知識を持つだけではなく、当事者が抱える困難や苦労といった現状、当事者との相違点・共通点について考えていくことがセクシュアルマイノリティ受容感を高めるために必要であると推察される。

3) 異質拒否傾向とセクシュアルマイノリティ受容感

異質拒否傾向は「性の多様性」授業の受講、個人的接触経験、知識と関連がなく、セクシュアルマイノリティへの共感的態度と負の関連があるという結果が得られた。また、異質拒否傾向はセクシュアルマイノリ

ティ受容感に負の影響を及ぼしていたことから、仮説3は一部支持された。異質拒否傾向とセクシュアルマイノリティへの共感的態度との間に関連が見られた理由として、相手を異質だと感じ拒否する傾向が低い人は、異質拒否傾向が高い人よりも相手のことを考えられるため、当事者との共通点に気づきやすく、当事者の立場を想像したり、当事者のことを踏まえた言動やセクシュアルマイノリティのことを深く知ろうとしたりするのではないかと考えられる。異質拒否傾向が低い人はセクシュアルマイノリティ受容感が高いため、異質拒否傾向はセクシュアルマイノリティ受容感には必要あると考える。

研究2 目的

セクシュアルマイノリティへの共感的態度に焦点を当てた「性の多様性」授業の効果について明らかにすることを目的とする。仮説は、以下の通りである。仮説4) セクシュアルマイノリティへの共感的態度を高める「性の多様性」授業の後には、授業を行う前に比べセクシュアルマイノリティ受容感が高まる。仮説5)

セクシュアルマイノリティへの共感的態度を高める「性の多様性」授業は、異質拒否傾向を下げる。

方 法

調査協力者

研究1の対象者のうち、研究2の協力について同意が得られた112名(平均年齢19.18±1.19歳、女性71名、男性41名)を分析対象とした。

「性の多様性」授業の内容

セクシュアルマイノリティへの共感的態度に焦点を当てた「性の多様性」授業の動画(30分程度)を視聴してもらった。「性の多様性」授業の動画は、具体的には、性の要素やセクシュアルマイノリティという言葉、当事者の割合等、セクシュアルマイノリティについての現状を伝えた。その後、異性愛を前提とした恋愛の話や同性愛者や体育の授業で男女が別だったことなどに対する想い、仮想事例(生まれたときに男性という性を割り当てられたものの、女性として生きることを望むトランスジェンダーの方の学生への教師の対応)を通し、異性愛を前提としている思い込みやセクシュアルマイノリティについて理解してほしいという当事者のつらい思いについて認識させることを目的とした。「性の多様性」授業の動画の最後に当事者との共通点について考えてもらった。

質問紙の構成

「性の多様性」動画視聴後、研究1で使用した質問項目(セクシュアルマイノリティ受容感、「性の多様性」授業、セクシュアルマイノリティの知識、異質拒否傾向)に回答を求めた。

結 果

「性の多様性」授業の効果を検討するため、独立変数を時期(前×後)、従属変数を社会的受容感、個人的受容感、異質拒否傾向とし、それぞれで対応のあるt検定を行った結果、社会的受容感、個人的受容感については授業後の得点が有意に高く、異質拒否傾向については授業後の得点が有意に低かった(表8)。

また、社会的受容感、個人的受容感、異質拒否傾向のそれぞれについて、授業後のデータの得点から授業前のデータの得点を引き、変化量を算出した。これらの変化量の関連を検討するため、ピアソンの積率相関係数を算出した結果、個人的受容感の変化量と異質拒否傾向の変化量との間に弱い負の相関がみられ(r

(110)=-.24, $p<.01$)、社会的受容感の変化量と異質拒否傾向の変化量との間には関連がみられなかった(表9)。

表8 「性の多様性」授業の効果

	社会的受容感		個人的受容感		異質拒否傾向	
	前	後	前	後	前	後
M	37.95	39.35	46.65	48.07	29.04	25.71
SD	4.44	3.46	8.41	7.63	7.59	8.99
t 値	4.79**		3.54**		6.71**	
df	111		111		111	
d	.35		.18		.40	

** $p<.01$ d=.20 (小さな効果) d=.50 (中程度の効果) d=.80 (大きな効果)

表9 変化量の相関分析結果

	社会的受容感	個人的受容感
異質拒否傾向	-.11	-.24**

** $p<.01$

考 察

セクシュアルマイノリティへの共感的態度に焦点を当てた「性の多様性」授業動画を視聴した後は社会的受容感、個人的受容感が高まり、異質拒否傾向が下がることが明らかになった。このことから、仮説4、5が支持された。

また、セクシュアルマイノリティ受容感の各下位尺度及び異質拒否傾向の変化量の相関分析の結果から、異質拒否傾向が下がることと社会的受容感を高めることに関連はないが、異質拒否傾向が下がることにより、個人的受容感が高まることが明らかとなった。本研究では、当事者に対し共感的な態度を表すものとして、当事者との共通点に気づくこと、当事者の立場を想像すること、当事者を踏まえた言動をすること、セクシュアルマイノリティについてより深く知ろうとすることに着目して、「性の多様性」授業を行った。非当事者にとって、性についての考えや価値観が異なると考えられる当事者に対して共感的な態度が「性の多様性」授業を通し形成されることで、考えや価値観が異なる存在を拒否するという異質拒否傾向態度が低減され、身近に当事者がいると想定しても受容できる個人的受容感が高まったと考える。このことから、セクシュアルマイノリティへの共感的態度を形成するような「性の多様性」授業を行うことは、セクシュアルマイノリティ受容感を高める上で有効であると考えられる。

総合考察と今後の課題

本研究は、経験としての「性の多様性」授業の受講や個人的接触経験、知識量や「性の多様性」授業を通して形成されたセクシュアルマイノリティへの共感的態度、個人特性としての異質拒否傾向から、セクシュアルマイノリティ受容感を高める要因について検討した。

研究1では、個人的接触経験がある人が、ない人に比べて、セクシュアルマイノリティ受容感が高いことが明らかになった。個人的接触経験については、間接的接触経験、直接的接触経験の両方の経験がある人が、どちらの接触経験がない人よりも個人的受容感が高かった。過去に「性の多様性」授業を受けたかどうかについてはセクシュアルマイノリティ受容感と関連はなかったが、これまでの「性の多様性」授業を通してセクシュアルマイノリティへの共感的態度が形成され、セクシュアルマイノリティ受容感を高めることが明らかになった。

このことから、当事者と関わることやセクシュアルマイノリティがテーマの小説や漫画を読むこと等の個人的接触経験があること、「性の多様性」授業を通して当事者との共通点に気づいたり立場を想像したりする等セクシュアルマイノリティへの共感的態度が高まることで、セクシュアルマイノリティ受容感を高めるには有効であると考えられる。

研究2ではセクシュアルマイノリティへの共感的態度に焦点を当てた「性の多様性」授業の動画を視聴した後は、視聴する前よりも、セクシュアルマイノリティ受容感が高まり異質拒否傾向が下がることが明らかになった。このことから、セクシュアルマイノリティ受容感を高めるには、セクシュアルマイノリティへの共感的態度に焦点を当てた「性の多様性」授業を行うことが有効であると考えられる。また、「性の多様性」授業の動画を視聴し、異質拒否傾向が下がるほど、個人的受容感が高まっていたが、異質拒否傾向の低下と社会的受容感の変化量とは関連は見られなかった。「性の多様性」授業を通し、当事者との共通点に気づく、当事者の立場を想像するなどのセクシュアルマイノリティへの共感的態度が形成されることにより、異質な存在を拒否しなくなり、当事者が身近にいると想像した時の個人的受容感が高まると考えられる。

また、研究1, 2ともに異質拒否傾向は個人的受容感に影響を及ぼし、社会的受容感には影響を及ぼさなかった。異質拒否傾向は友人との関わり方について測

定する尺度であり、個人的受容感は当事者が身近にいると想定したときに受容するかを測定する因子であり、どちらも友人や身近にいる人との関わりを想定した項目であった。そのため、異質拒否傾向は、自分が関わる可能性については考慮しないセクシュアルマイノリティという存在や概念を社会の中で受容できることに関する社会的受容感とは関連せず、個人的な受容感と関連したと考えられる。このことから、社会的受容感と個人的受容感は区別して考える必要があると考えられる。社会全体の制度などを考える際には社会的受容感が大切であるが、当事者と関わる際には個人的受容感が大切である。社会的受容感、個人的受容感の片方を高めるのではなく、両方を高め、セクシュアルマイノリティ受容感を高めることが、当事者を受容するために必要であると考えられる。

また、本研究の成果として、セクシュアルマイノリティ受容感を高めるためには、当事者との共通点に気づく、当事者の立場を想像する、当事者を踏まえた言動を行っている、セクシュアルマイノリティについてより深く知ろうとする、というセクシュアルマイノリティへの共感的態度が必要であるという点を提示できたことは意義があると考えられる。

本研究の課題として、以下の点が挙げられる。第1に、個人的接触経験をした後のセクシュアルマイノリティへの共感的態度について尋ねていない点である。今回、セクシュアルマイノリティ受容感には、当事者と関わる、当事者が出演する番組を見る、セクシュアルマイノリティをテーマとした小説や漫画を読む等の個人的接触を経験が関連していたことから、個人的接触経験によって、当事者との共通点に気づくなどの共感的態度が形成された可能性が考えられる。個人的接触経験は個人が関心や興味をもって行われる可能性があるため、個人的接触経験があることは、当事者の立場を想像し理解すること、当事者を踏まえた言動をすること、より知ろうとする態度に繋がると考えられるが、個人的接触経験をした人に対し、セクシュアルマイノリティの共感的態度を尋ねて、この点を確認する必要があったと考えられる。第2に、「性の多様性」授業後の効果の持続についての検討である。本研究は介入直後であったため、セクシュアルマイノリティ受容感が高まり、異質拒否傾向が下がったが、この効果がどの程度持続するか明らかにしていない。「性の多様性」授業効果の持続性を明らかにし、セクシュアルマイノリティ受容感を高い状態で維持させる方法について考える必要がある。第3に、異質拒否傾向とセクシュアル

マイノリティへの共感的態度との関連についてである。今回、個人的受容感と異質拒否傾向との関連がみられたことから、身近に当事者がいることを受容する個人的受容感を高めることで異質拒否傾向を低下させる可能性が考えられる。高坂 (2010) は、異質拒否傾向のいじめ問題に関する有用性について述べており、異質拒否傾向はセクシュアルマイノリティだけではなく、いじめ問題や差別問題、セクシュアリティ以外のマイノリティの対する受容感に関連する要因ではないだろうか。そのため、セクシュアルマイノリティへの共感的態度と異質拒否傾向についての関連を明確にすることで応用の可能性を検討できると考える。第4に、セクシュアルマイノリティの知識とセクシュアルマイノリティ受容感との関連についてである。本研究では、セクシュアルマイノリティの知識を知識量として扱い、知識量とセクシュアルマイノリティ受容感との関連がないことが明らかになった。しかし、知識量ではなく、知識の質については検討していないため、今後、知識の質に着目するなどして検討が必要だと考える。

引用文献

- 北沢 拓也 (2019). 一橋大の責任, 認めぬ判決—同性愛暴露被害の院生転落死— 朝日新聞 2月28日朝刊, 37.
- 千葉 雄高 (2020). 「すべての市民に謝罪すべき」—性的少数者ら, 足立区議発言撤回受け— 朝日新聞 11月1日朝刊, 25.
- 福島 静恵 (2015). 多様性を認め合う関係づくりを目指したセクシュアルマイノリティ教育の試み—支援教育の視点に立った組織的田取り組みを通して— 神奈川県立総合教育センター長期研究員報告, 13, 55-60.
- 葛西 真記子・小渡 唯奈 (2018). 「性の多様性を認める態度」を促進する要因—セクシュアルマジョリティへのインタビュー調査— 鳴門教育大学学校教育研究紀要, 33, 50-59.
- 古長 治基 (2016). 性別及び同性愛者タイプと同性愛者に対する受容感の関連 九州大学心理学研究, 17, 45-51.
- 高坂 康雅 (2010). 青年期の友人関係における被異質視不安と異質拒否傾向—青年期における変化と友人関係満足度との関連— 教育心理学研究, 58, 338-347.
- 宮澤 仁・福富 護 (2008). 同性愛者に対する態度とメディア・リテラシーとの関連 東京学芸大学紀要, 58, 211-221.
- 中島 亜弥 (2012). 個人内要因の同性愛に対する態度への影響—同性に魅力を感じた経験の有無, 知識, 接触, 他者理解度など— 兵庫教育大学大学院 学位論文
- 佐々木 掌子 (2018). 中学校における「性の多様性」授業の教育効果 教育心理学研究, 66, 313-326.
- 田中 美月・伊藤 拓・葛西 真記子 (2019). 同性愛者 (LG) への態度と被異質視不安傾向・異質拒否傾向との関連 鳴門教育大学学校教育研究紀要, 33, 121-129.
- 和田 実 (2008). 同性愛に対する態度の性差—同性愛についての知識, 同性愛者との接触, およびジェンダー・タイプとの関連— 思春期学, 26 (3), 322-334.
- 和田 実 (1996). 青年の同性愛に対する態度: 性および性役割同一性による差異 社会心理学研究, 12 (1), 9-19.
- Washington, J. and Evans, N.J. (1991). Being an ally
- Evans, N.J. and Wall, V.A. (Edi) *Beyond Tolerance: Gays, Lesbians, Biseuals on Campus*, American Coll. Personal Association, Alexandria, VA. 195-204.

Research on the feeling of accepting sexual minority of college students -Focusing on empathic attitude towards sexual minority-

WAKABA MUKAI (*Central Saga Public Health and Welfare Office*)

NAOKO SONODA (*Department of Psychology, Faculty of Literature, Kurume University*)

MAYUMI TOMITA (*Department of Psychology, Faculty of Literature, Kurume University*)

Abstract

In modern Japan, it is important for sexual minority non-parties to understand and accept the parties because they do not fully understand them. Therefore, in this study, we examined the factor for increasing the feeling of accepting sexual minority. In Study 1, it was clarified that the feeling of accepting sexual minority were related to personal contact experience with the parties, low of tendency toward uniformity in friendship groups and empathic attitude to the parties formed through “sexual diversity” class. In Study 2, we examined the effect of “sexual diversity” class focusing on empathic attitude toward sexual minority. As the result, it was clarified that the class focusing on the empathetic attitude toward sexual minority was effective in raising the feeling accepting of sexual minority.

Keywords: sexual minority, the feeling of accepting, empathic attitude, “sexual diversity” class